

ウィルフレッド・キャントウェル・スミス著

おやさと研究所嘱託研究員

『宗教の意味と終極』(国書刊行会, 2021年)と『世界神学をめざして』(明石書店, 2020年)

澤井 義次 Yoshitsugu Sawai

20世紀後半、世界の宗教学界において最も影響力のあった宗教学者として、私たちはシカゴ大学のミルチャ・エリアーデ(Mircea Eliade 1907-1986)とハーバード大学のウィルフレッド・キャントウェル・スミス(Wilfred Cantwell Smith 1916-2000)を挙げることができるだろう。エリアーデの主要な著作は、わが国でも堀一郎などによって邦訳され、これまでに多くの読者を得てきた。ところが、スミスの著作は、今日まで世界的に幅広く読まれてきたにもかかわらず、主要な著書が邦訳されてこなかった。そうしたこともあってか、わが国では、スミスの宗教学論に関心を抱く人々は、これまでそれほど多くはなかった。

しかし、宗教学の古典的名著とも言える、スミスの主要著作の2冊がようやく邦訳された。待望の邦訳書の刊行である。それらは『宗教の意味と終極』(保呂篤彦・山田庄太郎訳、国書刊行会, 2021年)と『世界神学をめざして—信仰と宗教学の対話』(中村廣治郎訳、明石書店, 2020年)である。原書はそれぞれ、*The Meaning and End of Religion: A New Approach to the Religious Traditions of Mankind* (New York: The Macmillan Company, 1963)、および *Towards a World Theology: Faith and the Comparative History of Religion* (Philadelphia: The Macmillan Press, 1981) である。

著者のスミスは、カナダのトロントで長老派プロテスタントの家庭に生まれた。彼はトロント大学やケンブリッジ大学において、アラビア語やイスラーム学を学び、プリンストン大学で学位を取得した。モントリオールのマックギル大学において、イスラーム研究所の初代所長を務めた後、ハーバード大学に招かれ、長年にわたり同大学の世界宗教研究所長を務めた。評者もハーバード大学大学院に留学していたとき、博士課程ゼミで、スミス教授から直接、宗教学研究の方法論について学ぶことができた。とても意義深く、有難い機会であった。

さて、『宗教の意味と終極』は、スミスの宗教学研究の方法論を論じたものである。宗教を理解するには、「人格的」(personal)な理解が重要であることを強調している。スミスは人間の宗教生活の内的な側面と外的な側面をそれぞれ「信仰」(faith)と「累積的伝統」(cumulative tradition)と呼ぶ。「信仰」とは「人格的な信仰」、人間の内的な宗教体験とか宗教への内的関わりのことであり、「累積的伝統」は宗教伝統において、教会(寺院)、聖典、神学体系、道徳的規範、神話など、世代を超えて伝承される外的なもののことである。スミスにとって「信仰」とは、「その人にとってその伝統が意味するもの」のことでもある。この著書において、彼は「信仰」と「累積的伝統」という一対の概念を用いて、世界の諸宗教伝統を捉えなおし、新たな宗教学研究のあり方を構築しようと試みている。

一方、『世界神学をめざして』は、『宗教の意味と終極』にお

ける宗教学研究の方法論をふまえて、他者の信仰を理解するばかりでなく、さらには新たな時代の要請に応えるためにも、諸宗教の共存・相互理解にもとづく「世界神学」を構築すべきことを説いている。スミスが言う「世界神学」とは、多様な「信仰」を解釈し批判的に概念化する『世界のすべての宗教』から生まれる神学のことである。それは「比較宗教の神学」(the theology of comparative religion)を意味する。

最後に、これらの著書の構成を紹介しておこう。まず、『宗教の意味と終極』については、以下のとおりである。本書には、同書のFortress Press(1991)版に収載されている宗教哲学者ジョン・ヒックの「序文」も邦訳されている。

- 序文 ジョン・ヒック
- 第一章 序論
- 第二章 西洋における「宗教」
- 第三章 他の諸文化。「諸宗教」
- 第四章 イスラームという特殊な事例
- 第五章 この概念は適切か?
- 第六章 累積的伝統
- 第七章 信仰
- 第八章 結論

さらに『世界神学をめざして』は三部構成で、全体で九章から成っている。

- 第一部 宗教学—歴史的
 - 第一章 単数形の宗教学
 - 第二章 プロセスへの参加としての宗教生活
- 第二部 宗教学—学術的・理性的
 - 第三章 序説—宗教と人間の概念化
 - 第四章 人間的知の形式としての自己意識 (一)
 - (一) 一般的—客観性と人間的科学
 - 第五章 人間的知の形式としての自己意識 (二)
 - (二) 宗教の場
- 第三部 宗教学—神学的
 - 第六章 比較宗教の「キリスト教」神学?
 - 第七章 イスラーム? ヒンドゥー教? ユダヤ教? 仏教?
 - 特にキリスト教以外の共同体との関連における比較宗教の神学
 - 第八章 われわれの中のキリスト教徒にとっての比較宗教の神学
 - 第九章 中間的結論

これらの著書は、現代の宗教学が抱える課題を検討するとき、さらに現代における宗教あるいは信仰の意義を考えると、大変示唆に富む好著である。ぜひ一読を薦めたいと思う。

